

第6回 理化学研究所運営・改革モニタリング委員会 議事概要

日 時： 平成 27 年 2 月 27 日（金）15 時 00 分～17 時 35 分

場 所： 理化学研究所東京連絡事務所

出席者： 【委員】野間口有委員長、家泰弘委員、池田雅夫委員、手塚一男委員

【理研】坪井裕理事、古屋輝夫理事、大江田憲治理事、

加藤重治理事長特別補佐、田中拓男研究不正再発防止改革推進本部員、

山崎泰規研究不正再発防止改革推進本部員、

一色亜希子研究コンプライアンス本部調査役、

生越満研究不正再発防止改革推進室長 他

議事概要：

（1）理研の取組みについて

委員からの指摘事項のうち、宿題となっていたものについて資料が提示された。

（2）評価書について

事務局からの説明の後、委員より以下のような意見が出された。

- ▶ 全体の構成について、前回の議論では STAP 問題への対応が最初にある方がよいということになっていたが、その形にしてみると、当委員会の目的が STAP 問題の検証にあるように見えてしまう恐れがあると感じた。現在の形（まずアクションプランはアクションプランとしてその遂行について検証した上で、アクションプランを策定し実行していたら STAP 問題が防げたかという視点）がよいと思う。
- ▶ 調査委員会の報告を受けた対応のところで、法的措置の件が最初に来ていると変な感じがする。最後が良いのではないか。当委員会はアクションプランがどうかというところをまず見ている。
- ▶ STAP 問題の検証部分の分量が多い。当委員会としては、この問題にはあまり深入りしない方がよいのではないか。書くとしても、理研の説明の大部分は付録にするということも考えられる。
- ▶ 内部監査と監事との連携がある程度の具体性をもって出てきてしかるべきではないか。それがなく、ただ課題として残されているのはものたりない。内部監査や監事の連携は非常に重要である。具体的なものがないと監事は機能しにくい。そこで内部監査との連携を、と言っている。
- ▶ 監査とコンプライアンスに分けたことはポジティブなことなのでアクションしたと入れて、今後の課題を書くように充実させる必要がある。
- ▶ 独立させただけでは不十分で、実際にやろうとしていること、連携の意識がないと具体的に書けない。
- ▶ 「科学ガバナンスの強化」という言葉は、理研の運営に対する科学者のコミットメ

ントという意味らしいが、下手すると研究者を管理するような逆の意味にとられる。理研の研究者がこれを読んだときにそのような印象を受けるとよくない。

- 研究不正を防止するためのガバナンスという意味合いもあるのかと思った。
- 「科学的視点に基づくガバナンス」という趣旨ではないか。
- 論文全体を共著者全員で確認することは求めないのか。分野の特性により、それが現実的でない分野もあることは理解するが、現実的に可能な分野については何か書けないか。
- 日本学術会議が文科省から依頼されている審議依頼への回答案でも、オーサーシップについて、「論文の最終版を承認し論文の内容を説明できること」が論文の著者になれる条件の一つとしている。もちろん分野によるという但し書きはついているが。
- 日本学術会議での検討結果もそうなっているのであれば、それを加味すべきではないか。
- 新設のチェックシートの実効性については、機械的に「確認した」とするような無責任なことがないように留意しなければならない。
- チェックするときの心構えに対しては大いなる警鐘にはなる。今までの惰性或信頼の連鎖ではなく。やはり、今回のように世紀の大発見の場合は、もう少し謙虚であるべきであった。
- チェックシートの前提として研究倫理教育がある。そういう風土を醸成するということで、無責任なチェックをなくし、研究不正を防止するということ。
- STAP 問題の検証部分は、理研の対応を淡々と書いて、当委員会の評価はまとめて書いてはどうか。実際やむを得なかったと思うが、項目の度にやむを得なかったと書くのではしつこくなる。全てに判断を下す必要はないので、いくつかポイントになることに絞って評価をしてはどうか。
- 一般の人がみるとアクションプランの検証を行うはずの委員会がどうして STAP 問題まで検証するのかと思うだろう。アクションプランについて今まで検証してきたが、これが機能すれば STAP 問題がどうであったかという視点であるということを書き加えるといいのではないか。
- 一連の理研からの説明を受けて当委員会としてはこう評価する、とシンプルにまとめる。
- 着任した後直ちに投稿された論文でデータはそれ以前のものであったという書き方では、理研には責任がないと見えているように見える。それはおかしい。研究ユニットリーダーとしての着任前に 2 年間近く客員として理研で研究していた期間があった。その責任を理研としてどう考えるか。自分の組織をふりかえっても、客員は組織に対する忠誠心が低いので、客員に対する教育も大事にしないといけない。
- 総評と同様に、理研のマネジメントの問題もあるということ認識した形にすべき。

- この頭脳循環時代に合った提言にしないといけない。
- 毎年の簡易な研修について、コンプライアンスブックを基本にして 20～30 設問をつくるというやり方がある。説明したあと練習問題を出す。なかなか 100 点満点はとれないが、リマインドするのに役に立つ。自助努力として考えてはどうか。
- ラボに配付したという「責任ある研究活動のために」は IAC/IAP が作成した文書の翻訳で、その性格は「不正防止の手引き」というよりは「行動規範」に当たるものである。
- 今後に向けての期待として、当委員会を今後どうするかという議論もあるが、理研が自律的に改善の PDCA を回すことも想定すべきなので、新年度に、理事長中心に考えてもらうのが良い。

以上